

ベートーヴェン

交響曲第3番変ホ長調、作品55「英雄」

交響曲第1番、第2番では古典的な枠組みの作風をしたためたベートーヴェンであったが、1805年4月に発表されたこの交響曲第3番は真にベートーヴェンらしい雄大な傑作となった。この交響曲は当初、ナポレオンに捧げるために書き始められたが、そのナポレオンがフランス皇帝の座に着くと、ベートーヴェンは「ナポレオンもただの暴君だったのか」と大いに怒り、「ある英雄の思い出のために」と献呈譜を書き換えたのは有名な逸話である。なお、第2楽章は葬送行進曲だが、「英雄の魂は死してもなお蘇る」という意味で、特にナポレオンの死を予言したものではない。曲は以下の4つの楽章よりなる。

第1楽章：アレグロ・コン・ブリオ

第2楽章：葬送行進曲、アダージョ・アッサイ

第3楽章：スケルツォ、アレグロ・ヴィヴァーチェ

第4楽章：フィナーレ、アレグロ・モルト

この「英雄」はベートーヴェンの交響曲第5番と並んでフルトヴェングラーのお気に入りであり、録音も以下のように多数残されている。

1. 1944年12月19、20日、
ウィーンpo.、ウィーン、ムジークフェラインザール
2. 1947年11月10～17日、
ウィーンpo.、ウィーン、ムジークフェラインザール
3. 1950年6月20日、
ベルリンpo.、ベルリン、ティタニア・パラスト(L)
4. 1952年1月19日、
ローマ・イタリア放送so.、ローマ(L)
5. 1952年11月26、27日、
ウィーンpo.、ウィーン、ムジークフェラインザール
6. 1952年11月30日、
ウィーンpo.、ウィーン、ムジークフェラインザール(L)
7. 1952年12月7日、
ベルリンpo.、ベルリン、ティタニア・パラスト(L)
8. 1952年12月8日、
ベルリンpo.、ベルリン、ティタニア・パラスト(L)
9. 1953年8月26日、
ルツェルン祝祭o.、ルツェルン、クンストハウス(L)
10. 1953年9月4日、
ウィーンpo.、ミュンヘン、ヘルクレスザール(L)

まず1は1953年、フルトヴェングラーの存命中に米ウラニア社から発売されたが、フルトヴェングラーの訴えによって発売が中止され、一時は“幻のウラニア盤”となっていたもの。聴衆不在の放送用録音だが、この10種類の演奏では最も劇的であり、現在でもこの1をあらゆる「英雄」の最高の演奏とする人は多い。3,7,8はベルリン・フィルの重厚な響きが魅力で、音質はいずれも明瞭である。

このディスクの演奏は6だが、データを見ればわかるように、有名なHMV(EMI)のスタジオ録音の直後である。この年の7月、フルトヴェングラーは過労から肺炎になり、夏の予定をすべてキャンセルして静養していた。復帰後の最初の仕事は11月24日～27日に行われたHMVのスタジオ録音で、順にベートーヴェンの交響曲第6番「田園」、同第1番、同第3番「英雄」(5)、そしてこのディスクの公演である6(29日が初日)が行われた。ちなみに、12月1日～3日は同じくHMVの録音でベートーヴェンの交響曲第4番、ワーグナーの歌劇「タンホイザー」を指揮し、その後フルトヴェングラーはベルリン、フランクフルト、トリノに飛び、翌1953年1月にはベルリン・フィルとドイツ各地をまわっている。同年1月23日、フルトヴェングラーはウィーン・フィルを指揮してベートーヴェンの第9を振ったが、第3楽章の途中で意識を失い、公演は中止となった(その後、再度入院した)。

以上のように、この6の前後、フルトヴェングラーの健康状態は安定していなかったが、このライヴの6にはそうした気配は全く感じられない。むしろ、5のセッションでアンサンブルがよく練られているため、5の立派さにライヴの即興性が加わり、非常に聴きごたえのあるものとなった(音質が鮮明なのも幸いだった)。同じライヴでも2004年になって初めて公開された10は、録音効果も手伝ってか、かなり渋い内容である。

2012年5月 平林直哉